

2021 年度目標達成状況報告書（メディア学部）

*自己評価は「S・A・B・C」の4段階で「S：十分満たしている、A：満たしている、B：概ね満たしている、C：満たしていない」

No.	評価基準		
1	年度目標	コロナ禍のあとの教員の働き方を確立する。	
	年度末報告	学部の自己点検 WG による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	メディア学部においては、教育面と運営面のいずれにおいても、通常勤務と在宅勤務の双方への対応が円滑に行われた。学部内の会議については、ほぼ全てで遠隔形態に対応できており、特に教授総会やアゴラにおいては、ハイブリッド形態での実施を円滑に進めることに成功した。 現在もコロナウィルスの感染状況は流動的であり、今後も対面実施が不能あるいは制限される可能性は多々ある。メディア学部では、オンラインへの移行対応が迅速に行える体制が常に整っており、コロナ禍への対応は十分であったと評価する。
改善策	現時点では、特にハイブリッド形態に対応する方法について、教員個別の知識やスキルに依存している面が多く、対応方法についても学部内で統一的な共有はできていない。今後は、学部全体ならびに全学での授業や会議に対し、オンライン・オンデマンド・ハイブリッドのいずれの形態にも対応できるような仕組みの構築が課題と言える。		
No.	評価基準		
2	年度目標	遠隔授業のメリットを保ちつつ、コロナ後の大学に相応しい授業形態を検討する。	
	年度末報告	学部の自己点検 WG による点検・評価	
		自己評価	B
		理由	メディア学部では、元々学問領域が遠隔形態と相性が良いという要因もあり、ほとんどの科目においては、コロナ禍における授業形態について積極的に能動的な対応がなされた。特に、ハイブリッド型の授業形態については多数の科目で対応できており、教育的な成果や授業評価アンケートによる評価向上への反映も多数報告されている。 一方、対面と遠隔の双方での教育効果についてはあまり分析がなされておらず、これまでのノウハウや経験をコロナ後に生かすための対応はまだ不十分と言える。
改善策	コロナ禍での遠隔授業を通じ、従来の対面形式にはない教育効果や様々な利点を詳細に分析し、次期カリキュラムの選定において次世代の教育手法の一環として柔軟に取り入		

			れていきたいと考える。
No.	評価基準		
3	年度目標	研究レベル向上のための施策を講じる。	
	年度末報告	学部の自己点検 WG による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	メディア学部では、新たに「創成課題大賞」や「卒研選抜発表会」を実施した。従来の対面形態では、学年全体が集まる機会を設けることが教室や時間割の関係上難しく、特に上級学年において全体的な行事開催は困難であったが、コロナ禍での遠隔実施では教室の確保が不要であるため、学年全体での表彰を実施することが可能となった。学生は、自身の所属する研究室のみならず、学年全体の優秀な研究成果を実感することができ、特に上位層においてモチベーションの向上に繋がったと考えられる。
改善策	学会発表数や外部組織からの受賞数の向上により、成績上位層にアピールしていく。同時に、学部全体での研究協力が促進する方策を補強していく。		
<p>【年度目標達成状況総括】</p> <p>教員の働き方に関しては、会議の効率化で成果が見られた。今後はアゴラ等で個別のニーズを掘り起こす。教育面では、いまだに「コロナ後」といえる状況になっていないため、目の前の問題に追われ十分に検討することができなかった。今後は、新しいコンセプトを活かした新カリキュラムの検討を進める。研究力向上については、以前から進めてきた施策が定着しつつある。</p>			

【2021 年度目標の達成状況に関する大学評価】（自己点検評価委員会）

年度目標 3 件に対し概ね達成されている。コロナ後の授業形態については次期カリキュラム改定の中で継続して検討してほしい。